

---

# **座りの悪い盆（私は何も見ていないシリーズ1）**

きりもんじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

座りの悪い盆（私は何も見ていないシリーズ1）

### 【Zコード】

N6715F

### 【作者名】

きりもんじ

### 【あらすじ】

信州白馬台高校で青酸カリが盗まれた。数日後湖から事故車が上がる。死んだのは村の実力者の次男坊。胃の中から青酸反応が出た。自殺か他殺か？大自然を舞台に塩山一族の怨念がつのる。

信州、国道148号線を大町から北に向かうと、JR大糸線に沿つてすばらしい山々と湖、スイスのアルプスと見まごうばかりの白馬の山なみに、誰人も感動する。5月の頃はまだ残雪も多く、夏のシーズン前で村人は田植えに忙しい。

青木湖のトンネルを抜けて五竜岳、遠見岳、白馬岳を望みながら山麓の村神城かみしろ、飯森いいもりをとおり、白馬八方の麓、岩岳いわたけ、森上もりうえへと向かう。

その昔、塩の道と呼ばれた街道だ。村の焼却場の手前に白馬台高校がある。オリンピック選手を多く生んだ名門校である。

いつもは静かな学校が今日は何かとあわただしい。

校門を入った所に長野県警のパトカーが1台止まつていて、もう1台灰色の県警の大型バンが奥のほうに止まっている。

なにやら学校で事件があつたみたいだ。廊下を行くと理科室の手前から『立ち入り禁止』と書かれた県警の黄色いロープが張つてあり、理科室内があわただしい。

長野県警のベテラン田中刑事が教頭から事情聴取をしている。鑑識が数人作業をしている。

「盗まれたものはシアノ化カリウムとナトリウムの一瓶だけですね？」

「そうです。この一瓶だけがなくなっています」

教頭は毒物薬品棚の一瓶ぶん空いたスペースを指差しながら他の毒物の濃い茶色瓶を確認した。

鑑識の山本が田中刑事に近づいて鎖の切り口を手にとつて見せながら、

「皮手袋をはめての犯行のようです。鉄製の鎖を番線カッターで一発で切っています。用意周到な力持ちのプロと考えられます」

「ふむ、プロ？・・・・・かもな」と言つて田中は手帳にメモをした。

山本は、足跡の測定をした後田中に聞いた。

「この村で事件が起きますかね？」

「さあ、わからん」

田中刑事はぶつきらぼうに答えた。

それから数日後事件は起きた。青木湖の湖底から高級乗用車が引き上げられたのだ。死亡した運転者は信濃森上の大地主、塩山家の次男坊塩山清一35才。深夜に湖の崖の急カーブを曲がりきれずに、

ガードレールの間から猛スピードで湖にダイブしたものと思われた。運転ミスによる事故死。だが、解剖の結果胃の中からシアノ化化合物による薬物反応が出て、死因は服毒死と判明した。

ということは、自殺、他殺の可能性も出てきたのだ。

鑑識の山本は気色ばんだ。

「よし、この事件俺が解決してやる」

## 塩山一族

Jの事件が起る前のどかな日、JR大糸線のジーゼル車に塩山清一と亜紀の父娘が乗っていた。

木崎湖から中綱湖、青木湖を経て白馬山麓をゆっくりと走る、すばらしい眺めだ。清一が遠くを指差して、

「亜紀、見て」「らん。あの山の上のほう」「わあ、きれい!まだ雪があんなに残ってる」「ああ、よく見て」「らん。あそこ、何の形に見える?」「お馬さん!お馬さん!」

「ああ、お馬さん!」せつくりだねえ。あれを田舎にしてこの村の人は田植えをするんだよ、だから「はは白馬」

「ほんと?」「ああ、ほんとだ」

あまりの美しさに、亜紀は大きなため息をついた。白馬の次の駅が信濃森上の駅だ。白馬駅でほとんどの人が降りてしまつて、がらがらになつた車内で一人降りる準備をする。

亜紀は小さな赤いリュックを背負い、清一も大きなリュックを棚から下ろす。

「おばあちゃん、元気かな?」

「そうだな。去年おじいちゃんが亡くなつて一年ぶりだもんな。でもそう変わっちゃいな」「あ」「そうだよね」

仲のよい父と娘、顔を見合わせて微笑んだ。駅から踏み切りを越えて田舎道を岩岳のほうへ歩む父娘の後姿。白馬八方山麓を背景にそのシルエットが美しい。

その昔、塩山一族は森上からおたり小谷村にかけての

塩の道を制する豪族だった。戦後の農地改革でも山林地主として生き残り、祖父の代まで膨大な山林を所有していた。

父の代で山林は三分の一に減少したが、それでも時価十数億の山林であった。その父が去年亡くなつた。母ヨネからの連絡で急遽亞紀をつれて久しぶりに帰郷した。ぐれて手の

つけられなかつた弟清一も隣村から駆けつけて来ていた。豹がらのミニスカートを着た女房春子を連れて。

ヨネは弟夫婦を心底毛嫌いしていた。ことに春子とは全く気が合わなかつた。父の遺言で全財産はしばらくヨネが一切管理することになつていたのだが・・・・。

ヨネには唯一の妹ヨシがいて、年は離れていたが一番気の合う肉親だつた。ヨシも5年前に亭主を亡くし、

一人娘の小百合とみそらのエコーランドで可愛いブティックを経営していた。今年29歳になる小百合もまた、3年前に夫と死別して母の元に戻つてきていた。仲のよい母娘であった。

ヨネは主人が死んでからこの1年、畑仕事をしながらこの大邸宅に独りで住んでいた。時々ヨシと小百合が

訪ねて来るへりて閑散とした塙山邸であった。

## 発作

そうしたある日、一ヶ月ほど前のことである。

早朝ヨネは急に咳き込んだ。息ができない。

それは苦しい喘息の発作であった。

ヨネはまごつめりとやつと電話口に出た。

「ゴホンゴホン。うひ。ヨシ。」

「どうした姉さん?」

「咳き込んで、苦しい。死にそうじや。ゴホンゴホン

「わかった。今すぐ行く!」

店の開店準備をしていたヨシは、受話器を置くと奥に向かつて叫んだ。

「

「小百合ーお店準備しどいてー！姉さんとこへ行つてくれるから。何か咳き込んで苦しそう。病院へ連れて行つてくれる」

「はーいーわかりました。おかあさんー！」

白馬みそらのエコーランド。数十軒のブティック、土産品店、喫茶店、レストラン。さらにプールやディスコなどがならかな坂道数百メートルの両側に立ち並んでいる。

可愛いブティック『SAYURI』はエコーランドのまほ中央にあるじんまりとした店舗住宅である。

ヨシは軽乗用車でみそらのからジャンプ台、八方コンド、ペンション村を越え、田舎道を抜けて森上までの数キロを急ぎ走った。

白馬山麓の旧家塩山邸は植え込み石垣に囲まれ、奥には古い土蔵まである。広い中庭と駐車スペース。古い乗用車が1台と軽トラが1台止まっている。

ヨネはその横に車を止めると踏み石を踏んで玄関へ駆け込んだ。

「ねえさん！ ねえさん！ 大丈夫？」

長い廊下を走り、ヨネの寝室の障子を開ける。床からはみ出しつらをむいてもがいでいるヨネ。ヨシは駆け寄りヨネの体を起こす。

「ねえさん！ 救急車を呼ぶわね！」

息絶え絶えのヨネ、苦しそうにうなづいた。

ほどなく救急車のサイレンが聞こえてきた。

Hコーランドの店内にいた小百合は、不安げに外を見る。

塩山邸に救急車が到着し、酸素マスクをあてがい担ぎ込まれるヨネ。ヨシも救急車に乗り込む。村人数人が不安そうに見守っている。

## 発作（後書き）

2週間ほど中国へ仕入れに行きますので休みます。  
検索で『覗ください』『映画村きりもんじブログ』

救急車が動き出しサイレンの音が遠ざかると、村人が立ち話を始めた。

「こんな大きなお屋敷、清一夫婦が越してくりやええがね」「あの嫁とじゅうまくいかんじゃろう。誰か一人つい」といやらんと、もうアラジヤ。喘息の発作が怖いよの」

その日の夕方、症状が回復して病院から戻つて床についていたヨネはそばで見守つているヨシに話しかけた。

「なあヨシ。わしももう年じや。一人じや心細うてなあ、こりいう事あるとよけいに。お前さえよけりやあ、小百合とこつちへ越してこんかな。一度相談してみてよな。一人で飯食つのももう耐えられん」

そういうわけで、一ヶ月前にヨシと小百合が越してきた。その日もヨシが店に出て小百合がヨネを見ながら、今日清一と亞紀が帰つてくるといつことじで、朝からあちこち部屋を掃除していた。

一年ぶり、白馬の山々を見ながら清らかな空気を胸いっぱいに吸い込んで、やつと清一と亞紀は塩山邸に着いた。父と娘、踏み石を踏んで玄関へ入つていく。亞紀はとても楽しそうだ。

玄関口で清一が、

「ただいまー！」

と言つて一人でたたずんだが、誰も出でこない。

二人顔を見合わせて大声でもう一度、

「ただいまー！」

亜紀が見上げて笑う。

奥からいとこの小百合が可愛いエプロンをつけて出てきた。

「すいません。奥の厨房にいたもんですから、

お帰りなさいませ、清一お坊ちゃん」

「何だ、小百合さんか、お袋は？」

清一と亜紀、玄関を上がり奥へ進む。廊下を歩みながら  
小百合が、

「ちょっと具合が悪くて休んでおられます。

こちらです、お坊ちゃん」

清一が笑いながら、

「その、お坊ちゃまと言つの止めてくれない」

「はい、それじゃ・・清一兄様」

「そう」

三人とも吹き出して笑い声が響く。

「清一さんでいいよ。・・エロー・ラングの店のほうは？」

「母と交替で見てますよ」

「そう」

三人ヨネの寝室に近づく。

## 小百合

寝室では、床に臥してテレビを見ていたヨネが、皆の笑い声に気付いてあたふたと起き上がり、居住まいを正して正座して待つ。障子が開いて

清一と亜紀、後ろから小百合が入ってくる。

清一と亜紀があいさつをする。

「母ちゃん、ただいま

「おばあちゃん、こんばんわー。」

ヨネ笑顔で、

「ああ、おかえり、おかえり」

小百合、一人のリュックを抱えて、「お荷物は奥の部屋へ運んでもらいます」

ヨネと清一が同時に、

「小百合さん、ありがとうございます」

皆で笑い、小百合が礼をして出て行く。

清一が不安げにヨネにたずねる。

「母ちゃん、元気? ジャニイよね。ビラしたんだよ?」「朝、立ちくらみがしての。今旦一日床でゆっくりしどったんじや。もう大丈夫じゃ。亜紀の顔を見たら元気が出てきたハハハ」

ヨネが亜紀の頭をなでて笑うと、

亜紀もにっこりと微笑んだ。

「小百合さんとヨシおばさんが交替で晦いに  
来てくれているんでしょ」

「お前には連絡せなんだが、ちょうど一ヶ月ほど前に  
ひどい喘息の発作が起きてのう、死に掛けたんじや。  
そのとおりヨシに飛んできてもうつて助かつた。

それからは一人じゃとても心細うつのう、わしから  
頼んでこつけへ越してきともうつたんじや」

「そりゃ心丈夫じやないか

「妹の所も5年前に亭主が死んで女一人じやうが

「じゃ、賄いは全部小百合さんが」

「小百合も知つてのとおり、お前と一緒にじや。結婚して  
すぐに連れ添いに先立たれて実家に帰つて来よつた。  
店のほうは交替で見とるようじや」

「清」「は？」

清一の一聲に、ヨネは敏感に反応して顔の相が変わつた。  
脇でおとなしく手遊びしていた亜紀も思わず手を止めて  
ヨネの顔を見上げた。

## 水炊き

「ふん、あいつら鬼じや。塩山の財産ばっかり狙うと。わしがまだ生きとるうちは、まだ爺さんの遺言があるからええが、わしが死んだら全部あの一家が持つていきよるぞ清一、気をつけんと一銭もお前の手には入らんぞ」

「いいじゃないですか。十分今これでいけていますから。なあ、亜紀」

亜紀、清一を見上げて微笑みうなづく。

「お前とは人間が違うんじやよ。清一は隣村の地主の娘と駆け落ちして、今は神城に住んどる。時々来るがの。酒の匂いをふんふんさせて相変わらずじや。わしはある春子という女が大嫌いで、何をやらかすかあの連中、まだまだ死ねん、ハアハア

「あまり興奮しないでください、かあさん！」

ちょうどこの時、小百合が飲み物を持って入ってきた。

「もうすぐ母が帰ってきます。店を閉めた帰りにスーパーに寄つて。今日は水炊きですよ」

亜紀がうれしそうに手を叩く。

「わーい。みずたき、みずたき。  
お手伝いしていい? 小百合姉さん」

「 もちろんこいわよ。 台所行く? 」

亜紀が清一のほうを向いて、

「 パパ、 いい? 」

ヨネは笑顔で 一部始終を見守つて居る。

清一が明るく答える。

「 もちろんこいともー。 」

亜紀は喜んで小百合の後について部屋を出る。

ヨネがしんみりとつぶやく。

「 あの子はほんまにええ娘じゃ、 ゴホゴホ」

清一、 すぐに駆け寄りヨネの肩を支えて、

「 ああ、 大丈夫? 休んで、 休んで」

「 お前達の笑い声が一番なんじやがの? 」

「 ああ

その時外で車の止まる音がしてヨシおばさんが帰つて来た。  
皆で迎えに出る。

## 三シおばさん

駐車場に軽自動車が止まって、見るからに人のよさやうなヨシおばさんが、手に一杯のビニール袋を提げて下りてきた。

小百合と亜紀が駆け寄る。清一も近寄る。

「小百合、まだ助手席にもあるよ。」

「あら、清一ちゃんお帰り！」

「ああ、おばさん。買い物いつもみません」

「なんのなんの。やあ、亜紀ちゃんもおねややくなつて！」

亜紀もビニール袋を両手に持つて、

「こんだけわ！」

「ここだけわ！ いへつになつたの？」

「9才！ 小学三年生！」

「もう9才！ どう？ 亜紀ちゃんは田舎好き？ 」

「だあいすき！」

「ハツハツハ。やうかね。」

「ハツハツハ。やうかね。」

ヨシは田舎大好きに感動して破顔笑顔になつた。

小百合と亜紀がビニール袋を持って先に行く。

後からゆつべつと清一とヨシ歩きながら、

「一ヶ月前に姉さんが喘息の発作で死に掛けてナ」

「ああ、今お袋から聞きました。おばさんに

命を助けられたとほんとに感謝していました

「どうしても清一夫婦には見てもうことがあります」と言つてなあ

「お袋は頑固だから」

「ああ、頑固頑固。」いや逆らへんと腹を決めて小田舎と越してきたんだじや」

「清一は？」

「清一は前より益々悪くなつた。」あつた親父さんの高級乗用車も持つていつたきり。むつひの親父が極道だで、清一もそれに染まつてしまつた。

「ふーん」

「氣をつけんと向られるか分からんよ、あの連中。」

「あの連中」

お袋と同じことを言つて思つて、清一は顔をしかめた。

## 座りの悪い盆

厨房では小百合と亜紀がビニール袋から食料、飲み物を出して冷蔵庫に入れたりしている。亜紀がペットボトル2本を出して、

「これ、どこへ置けばいいの？」

「あ、その盆の上に置いといて」

亜紀はペットボトルを丸盆の上においては見たが、すこぶる盆のすわりが悪い。

亜紀は不審げな顔をして、

「このお盆、少し変？」

と顔をしかめた。小百合は冷蔵庫に物を入れ、しまってから鍋類を出している。チラッと亜紀のほうを見て、

「ああ、それね。私のうちから持つてきたの。  
子供の頃よくそれで遊んだわ」

亜紀はまじまじと盆を見る。

「へー、どうやって遊んでたの？」

小百合、おもむろに亜紀に近づき、笑みを浮かべて丸盆からペットボトルを下ろす。盆に人差し指を当て、

「いやつやって、えいつ！」

盆が一回転して止まる。亜紀、驚いて、

「あつ、すごいー！」

と言つてすぐまねをするがなかなかうまくは回らない。

小百合が、

「ね、難しいでしょ。うまくいったらお慰み」

と言ひながら鍋の準備に取り掛かる。

亜紀は必死で盆を回そうとする。

人差し指を盆の淵に当てる、

「えいっ！」

盆がくるりと一回転した。

「わっ、おもしろい！」

一人の楽しそうな笑い声が響き渡る。

一方、廊下では深刻そうに話しながら、

清一とヨシが歩いてくる。

「よく分かりました。どうも」

清一がヨシに目礼する。ヨシは口に人差し指を立てて、ヨネの寝室前で立ち止まり障子を開ける。顔だけ出して、

「姉さん、ただいま！今からすぐ食事作るからね」  
テレビを見ていたヨネ、

「すまないねヨシ。ありがとうよ」

## 座りの悪い盆（後書き）

出張のため次の更新は1月13日になります。

## 夕餉

清一が入ってきてヨネの横に座り胡坐を汲む。

「かあさん、色々聞いたよ。ヨシおばさんから」「清一のこととかい？」

「ああ」

「できのいいお前ばかり可愛がりすぎで、ぐれたらんじや」

「まあな。できのいい長男は東京に行きっぱなし。できの悪い次男は、ぐれて隣村の娘と駆け落ち。近くへ戻ってきたものの、その娘は母さんの一番嫌いなタイプ。最悪だね、かあさん」

「そこまで分かってくれるんなら、帰ってきておくれよ」「ああ、今考えてるとこ」「ほんとうかい？」

「仕事はパソコンさえあれば何とかなる。

亜紀次第だね。学校のこともあるし」

ヨネ、黙つて涙ぐむ。

「食事の用意ができましたよ!」

ヨシの声が聞こえて夕食が始まった。

居間に全員が集合する。

水炊きの用意ができる。いい匂いだ。

床の間を背にヨネを清一が介助して座らせる。ヨネの脇に清一と亜紀が座つてヨシと小百合がまかないをしている。

「それじゃ、いただきましょうか？」

ヨネがそう言つと、畠一郎二郎、

「いただきまーす！」

と言つて食事がはじまった。絶対に壊したくない幸せな夕餉のひと時だ。涙をこじませながら、じつと野菜を噛み締めてくる母の横顔を眺め清一には、

かつての一郎を支えていた気丈な母の面影など、ひとかけらも見られないほど母は氣弱に見えた。

『おふくろも急に年をとつてしまつたものだ』  
清一は心でそつとやうつぶやいた。

清一には5才年下の弟清二がいる。共に白馬台高校の出身ではあるが、清一が優等生だったのに比して

清一はひねくれものの悪だつた。

それには原因があつた。幼い頃から利発だった長男清一を、ヨネは

心底愛し英才教育を施し、塩山家の跡取り息子として多大の期待をかけてきた。

逆に清一には塩山家の面汚しとして

人目もはばからず虐待した。

清一は中学校に上ると益々非行に走りヨネの手に負えなくなつていった。

清一は母の過度の期待と弟の存在とにいたたまれなくなり、東京の大学に入学と同時に何かと理由をつけては故郷に帰らなくなつた。

卒業後東京の出版社に就職してからはなさらだ。30歳で家族には内緒で結婚した。

亞紀が生まれて5年後に病弱の妻が死んだ。それからの5年間は父と娘の生活がずっと続いていた。

清一は高校を中退して隣村の堀金観光開発の

作業員としてバイトを始めた。社長の堀金留吉が塩山家の次男と知つて、それとなく手なづけ

ていったのだ。数年後清一は堀金の娘春子と駆け落ちをする。一人は数年東京あたりで同棲した後、神城に戻つて堀金の許可の下所帯を持つた。

そして昨年入退院を繰り返していた塩山の父が亡くなつた。葬式で兄弟が10数年ぶりに再会した。

白馬の隣村が飯森と神城である。五竜岳と大小遠見岳の山並みが見事に美しい。

堀金觀光開発は神城の五竜ゴンドラ乗り場を下つた留吉の所有地の中にある。

事務所で留吉と春子と清一がソファーに座つて話している。奥で女事務員が帳簿をつけている。

堀金留吉は葉巻に火をつけながら、

「清一、この間ばあさんが倒れたんだってな?」

「ああ、喘息の發作がきつうて」

「うちの家に電話くれりや、すぐ飛んで行つてやつたのに」

春子は憎憎しげにそういうタバコに火をつける。

テーブルにコーヒーが出ていて清一はコーヒーを飲む。

留吉が煙たげに葉巻を吸いながら、

「お前達があそこに住めば一番ええんじやがのう」

春子もまた父留吉と回り、ついタバコを煙たげにすいながら、「あのオバア、絶対にうつのこと嫌いじゃから、一緒にや住まんよ。うちも大嫌い！」

清一がコーヒーを飲み干して、

「お袋は兄貴べつたりじやけ、くそつたれ、いつか仕返しあしてやる。兄貴の言つことなら何でも聞きよる、くやー。」

と言つて床を強く蹴つた。堀金が、

「まあもう少しの辛抱じや。ばあさんが死にやあ、こいつのもんじや。財産の半分はお前のもんじや。数億はあるでよ」

堀金は笑みを浮べ清一を下田から見上げる。

清一はそれでも不満の様子だ。

「同じだけ兄貴にいくのは我慢ならん。全部いままでいじめられ続けたわしのもんじや」

「やつは言つても、相続放棄でもせん限り無理だで。それより変な遺言でもかかれたら最悪や。いま、妹のヨシバアと小百合が面倒見とると言つじやないか、全部持つていかれるぞ」

「くわ。あの兄貴やえおらんけりや」

堀金が葉巻を消しながら清一を見つめて意味ありげにうづいた。

それから数日後のことである。毎日五月晴れのつづいたすがすがしい朝、Hマークの店SAYURIエンドの店舗が掃除していた。

そこに村人が自転車を止めてヨシに声をかけてきた。

「ヨシさん、あんた聞いた？あんたんとこの甥つこ清一が、あちこち借金しまくって歩いとるだや

「大町の飲み屋の付けじやないのけ？」

「その何倍もの借金じやとよ。しかも、その金全部兄の清一が払うとこつて借用証勝手に書いとるぞ」

ヨシは不安顔で聞き入っている。

「何でも數千万じやきかんらじこだ。噂じや、億越したとか  
越さんとかかの話じや」

「・・・・・」

そつ言つて村人は去つていつた。

その日の夕方、買い物をして帰ったヨシは、ビニール袋を全部小百合と亞紀に渡して玄関先でことの全てを清一に話した。

清一は上を向いて腕組みし、じばらぐ考え、力を込めてヨシに答えた。

「わかりました。おばさん！心配かけてごめんなさい」

翌日はすばらしい天気だった。山々の峰が間近に見えて新緑が生命の息吹を叫んでいる。清一は思わず大きく深呼吸をして、ここはいい所だと思った。

冬の八方はいわすと知れたスキーのメッカ。上級者達がこぞって挑戦するのがこの八方スキー場正面のスラロームだ。夏の八方はといふと、これまた三千メートル級の

山並みを望みながら標高一千メートルのトレッキングができる超一流の山歩きスポットだ。

大雪渓、尾根歩きとなると本格的な装備が必要だが、千数百メートルの八方尾根までなら、ゴンドラと二つのリフトを乗り継いで誰でもすぐに登れる。

この日、ヒマーランドのお店を臨時休業して清一と亞紀と小百合は、八方尾根まで登ることにした。

「さあ、寝室でヨシが話し相手をしている。清一が入ってきて、「じやあ、かあさん、亜紀をつれて八方尾根まで登つてくるよ」

「ああ、たのしくやるんだよ。亜紀は田馬鹿を好きになつて、ちらわなくちや、何も始まらないからねえ。お前もこの村の良さをもう一度再確認することだね。いつてらっしゃい！」

「わかりました。よしあばきを行つて来ます。  
お袋の相手をしどこでやだぞー」

「ああ、大丈夫だよーひがは。小百合は山のこと詳しいから。天気が急変しそうだつたら小百合の山のことを聞いて、すぐ引き返してきておくれよな」

「はい、よくわかりました」

「小百合もこの私と一緒にこの村が大好きでな、空氣の香りと空の色で1時間後の天気がはつきりと分かるだで」

## 姉妹

「どうもありがとうございます、おばさん。勉強、勉強で村のことを一番知らないのは、間違いなく

この私は。小百合わんの言つことによく聞いて行つて来ますから安心してください」

「はい、じゃあ氣をつけて」

「夕方6時には戻ります」

玄関から亞紀の叫ぶ声が聞こえる。

「パパー、まだ？早く行こうよ」

「あー、今行く！」

小百合と亞紀の笑い声が聞こえる。

三人が出発した後ヨネとヨシは一緒にテレビを見ながらお茶を飲みお菓子を頬張つていた。ヨネがしみじみと、わしゃほんとに心安らかなんじやがのう」  
ヨシはせんべいをかじりながら、

「そん時や、下女とばあやで住み込ませてもうおつかいの、なー姉さん！」

「下女とばあやか。小百合が下女と言つ事はなかろう。お前がばあやはわかるがの」

「ほならお手伝いさんか？それでも十分じゃ」「なんのなんの、嫁でもええのとちがつか？」

「それじゃあ姉さん、あんまりもつたいないだで。第一二人ともその気が全然ねえだよ。

そろつてバツ一やしのう。わしらがどんなにやきもきしても、そりゃかなわんでよ」

「そりゃ、そうじや。ワッハッハッハ

三ネは久しぶりに腹の底から大笑いをした。

「医者が喘息はストレスからじやと言つとった。発作を起しさんためにも何とか亜紀に気に入つてもろつて、ここに越してきて欲しいんじやが」

「清一さんがそういうとんななさつたか？」

「ああ、仕事はパソコンとかで何とかなる言つてな。学校のこともあるが、亜紀次第やと言つとつた」

「そりゃ、亜紀ちゃん次第かー」

「そりゃ。あの亜紀ちゃん次第や」

明るい希望に一人は顔を見合させて微笑んだ。

## ゴンドラ

八方山麓ゴンドラ乗り場では、乗る人の列が続いていた。亜紀がおおはしゃいで小百合と話している。

「さより、お店はいいの？」

「ええ、だいじょうぶよ。臨時休業。今日はお休み。コネおばさんはうちの母が見ていくし今日一日ゆっくりしまじょり。ねえ、清一兄様」

「すまないね、ありがとう」

三人手をつないで家族のよう。清一と小百合、顔を見合させて照れ笑いをしている。

うれしそうにそれを確認して微笑む亜紀。順番が来てゴンドラの扉が開いた。清一が先に乗り込んで亜紀の手を引く。

「さあ、気をつけて」

次に小百合の手を引く。見詰め合つ清一と小百合、しっかりと手を握る。そのしぐさをうれしそうに見つめている亜紀。

ゴンドラが急上昇して視界が開け、森の中の谷の上を昇っていく。亜紀が叫ぶ、

「わあ、こわい」

「じつとすれば大丈夫だ」

清一が父親らしく言うと、小百合は優しく微笑んだ。

視界がさらに開けて、小百合と亜紀が同時に叫ぶ。

「わー、きれい！」

清一も思わず見とれて、

「すばらしい景色だねえ」

心の底からそう思つて叫んだ。

18歳で東京に出るまで暮らしたこの村が、こんなにすばらしい大自然に包まれていたとは今まで気付かなかつた。おろかな人間の欲望に翻弄されて、

もう故郷へは絶対帰るまいと心に誓つて20余年、時とともに清一の心情も大きく変化しようとしていた。

ゴンドラの終点に着いて三人、軽やかな気分で次のリフト乗り場へと歩む。

「今度はリフトだ、これは難しいぞ」

「ほんと？」

「大丈夫よ。3人乗りだから真ん中に座らせてあげる

「わーい、よかつた！」

リフトは3人並んで座る。前の人と同じようにまねをしてもすつと何とか楽に座れた。亜紀の緊張は一瞬だつた。清一と小百合に挟まれて幸せが心を包んでいた。

リフトはとてもゆっくりと上昇していく。足が届きそうな所もある。笑顔一杯の三人の姿。さわやかな風、新緑の香り、残雪の山なみ。

## 八方尾根

さうにリフトを乗り継いで八方尾根頂上に着くと少し肌寒い。

周りの山脈の絶景に3人はしばし見とれていた。清一が小百合に礼を述べる。

「小百合さん、今日はほんとにありがとうございます」

「こちらこそ。とても楽しいです。

ねえ、亜紀ちゃん？あら？」

亜紀が見当たらない。

「はーい、お二人さん。こっち向いて！」

亜紀が向こうからカメラを構えている。

清一と小百合が思わず顔を向けた瞬間、亜紀がカメラのシャッターを切った。

「はい、ツーショット。決まりだね」

亜紀は確信をこめて一人つぶやいた。

八方尾根を下りてから3人はみそのヒルランドを歩いた。色んなお店がある。ディスコやプールまである。

店SAYURIでちょっと休憩して夕方6時、ポンコツ乗用車で帰宅した。

「わー、こーにおい！」

「きょうはすきやきですよ」

「お祭も食べるのかい？」

「お医者様から、ゆっくりかんでどんどん食べなさい  
つて言われたそうです」

「ふーん。ゆっくり噛んでか・・そりゃそうだ」

3人の笑い声が屋敷中に響き渡る。

食卓の用意ができるて、居間に3人が入ってきた。

「ただいまー、帰りました」

ヨシが鍋に肉を入れながら、

「おかえり、すぐに食べられるからね」

ヨネも元気そうだ。

「おかえり。楽しそうだね。笑い声が一杯で、  
これじゃすぐに元気になれるよ私も」

ヨネがうれしそうに笑う。ヨシが、  
「こつでもどこでも笑顔が一番！」  
と言つと皆一斉に大笑いをした。

塩山家の楽しい夕餉が今日も始まる。  
といひが今夜は少し様子が違つた。

しばらくしてから一台の高級乗用車が音もなく  
塩山邸に入ってきた。運転しているのは春子。  
助手席には酔つた清一が乗つている。

## 横つ面

車が止まると清一は扉を開けて荒々しい足取りで玄関口を駆け上がった。廊下を大きな音を立てて走る。豹がらのミニスカートをはいた春子が後を追う。

「やめなさいよ、あんた！ やめなさいよ！」

物音に居間の階は緊張する。食べる手を止め廊下を注視する。荒々しい足音。障子が乱暴に開けられ、酔った清一が現れた。

「ひらり、兄貴。黙つて帰つてきやがつて、財産の半分はわしのもんじや。絶対、兄貴に独り占めはさせんぞ！」

と大声で叫んだ。清一は黙つてすつと立ち上がり、清一の横つ面を平手で思いつきり打つた。  
『ビシッ』と大きな音がする。

「わーっ

清一が泣きべそをかきながら、左の頬を両手で抑えて廊下を走り去つていった。

「わーっ。兄貴ばかりいい子にしゃがつて、わしはいつものけもんや。こんちわじょう。いまにみてろよ」

「ほり見て」「らん、あんた

後を追う春子の声が聞こえ、

急発進の車の音がして一人は去つていった。

ヨシがぐつぐつ煮える鍋の火を消す。

皆緊張の面持ちで座りなおす。

清一がおもむろに、

「母さん、来年の春に亜紀といつちへ引っ越しするよ

ヨネは驚いて亜紀に、

「ええつーーのかー、亜紀ちゃん?」

亜紀は微笑みながら答えた。

「うん、いいよ。小百合姉ちゃんと一緒に暮らせるとなり

小百合は困惑してヨシとヨネの顔を交互に見る。  
ヨネが間をおいて、

「皆一緒に住んどりやええじゃないか。屋敷は広いんじゃし。  
なあ、ヨシ」

ヨシはせつせつと肉を鍋に入れ火をつけなおしながら、

「わたしや姉さんの傍が一番ええ!」

そこで又皆は大笑いをした。清一が、

「それじゃあドリヒトドリヒトよひこくお願いしまー」

亜紀も、

「お願ひしまー」

と頭を下げた。

「じやあやつ一度食べなおしー。」

清一が叫んで、塩山家の笑い声と楽しい夕餉が再び始まった。

## 清一の決意

「頃清一は春子の運転する車で田舎の凸凹道をのりのりと走っていた。助手席で悪態をつくる清一、

「くそっ、今に見ていろ殺してやる。兄貴さえいなければ、あのババアがくたばれば財産は全部わしのもんだ。10億の財産は全部わしのもんだ」

くわえタバコで運転しながら春子は一タリと笑い、さげすみの田で清一を見ていた。

『そのあとはそっくり私のものよフフフ』

深夜の塩山邸、一部屋だけほつんと明かりが点いている。清一とヨネが、ヨネの寝室で話している。

「それでお前、結婚を？」

「小百合さんさえよければ是非

「そりゃここの決まつるじゃないか。明日妹と本人に話をしよう。来春東京から越していくにしてもそのほうがつじつまが合つよな

「ああ、そのほつがいいと思つ……それからもつ一つ

「もつ一つへ

「もつ一つね願いがあるんだけど。遺言状を書こうとして欲しいんだ

「遺言状？」

「弁護士を通して正式の遺言状を書いて欲しいんだ

「それっておまえ・・・」

「長男清一の取り分は十分の一。後は清一にこやつてくれ。全て現金化した後と一筆書きといってくれたら助かるんだがな」

「山林もこの屋敷もかい?」

「ああ、もちろん」

「あつさつしてゐるね、お前は」

「完成したら真っ先に清一を呼んでその辺知りせであげる」と

「・・・・・」

「これしか清一を立ち直らせる方法はない」と思つ

「お前って子は、ほんとに」

「よく考えてみて母さん。じゃ、おやすみ」

邸内の明かりがぱつと消えて闇夜。美しい星空。

## 清一の決意

翌日の午後、青木湖湖岸の駐車場に清一と春子が乗った高級乗用車が止まっていた。

車は泥だらけで汚れている。今日は清一が運転席、春子は助手席でタバコを吸っている。清一が思案顔で語りかかる、

「どうやって兄貴を殺るかだ」「事故に見せかけることよ」「事故?」

「そう、たとえば眠り薬とか青酸カリとか飲ませた後で車じと湖の底に沈めるのよ」「なるほど」

「もし車が発見されても、死体は腐つて毒殺とは分かりやしないさ。事故。夜スピードをあげすぎてカーブを曲がりきれずに湖にがけからざんぶとダイビング。あるいは、目の錯覚で柵を乗り越え湖へ、なんどでもなる」

「よし、それでいい」「本気?」「ああ、もちろん。今までの苦難の人生に決着をつけるんじゃ」「

春子は黙つて次のタバコに火をつけた。

その晩清一はこつそりと白馬台高校の理科室に忍び込んだ。かつて中退する前に理科の実験に出たことがあった。その時化学担当の教師

（今の教頭）が注意事項を話した。

「ここの劇薬を扱う時だけは重々注意してください。特にこの青酸カリとか」

この時誰かが質問をした。

「どれが青酸カリですか？」

「このシアン化カリウムというのが青酸カリのことだ。  
こちらのシアン化ナトリウムも同様に劇薬だ」

清一は一度と実験に出る事はなかつたが、

この日の事は鮮明に覚えていた。

「あれが青酸カリだ。あの鎖は番線カッターで切れる」

清一は皮手袋をはめ、番線カッターを持って忍び込んだ。すぐに劇薬棚は見つかつた。瓶の位置もそのままだ。

清一は鎖を一気に切断するとすばやく二瓶を掴んで逃走した。

得意げに瓶を見せた時、春子は驚き血の気が引いた。

「あんた、ほんとに本気なのね？」

「ああ、本氣で決着をつけると言つたじやろが」

清一の気迫に押されて春子は策をひねり出した。数日後の晩に新発売の缶チューハイを持って塩山邸を一人で謝罪に訪れる。

ヨネは春子が引き止めておく。清一と清二が一人きり乾杯をすることができればもう殺ったも同然。時間は小百合とヨシバアが床についた頃、10時が一番いい。後は一人で清一を病院に連れて行くといって抱き出せばこっちのものだ。

全てはうまく行くと思えたのだが……。

数日後の長野県警本部。刑事課で田中刑事が鑑識の山本と話している。

「で、清一の胃の中の薬物は？」  
「青酸カリでした。致死量に達しています」  
「ということは、死因は溺死ではなく服毒死」  
「はい、そうです」  
「で？」  
「さりに靴の裏が白馬台高校の毒物窃盗犯のものとぴったり一致しました」

「ふむ、まちがいないな」  
「田中刑事、タバコに火をつけて、

「皮手袋、シアン化カリウムの空き瓶と、まだ未使用のシアン化ナトリウムの瓶どが車のトランクから見つかりている」

田中刑事、くわえたバコで報告書を書き始めた。

「塙山清一は死を決意して白馬台高校に青酸カリを盗みに入った。数日後の深夜ドライブをしながら

青酸カリを口に含み、「ぐぐりと飲み込んでから猛スピードで湖に突っ込んだ。覚悟の自殺といつ訳だ」

田中刑事、調書の下書きをしながら山本を見上げる。山本は疑問ありげにしぶしぶうなづく。

その晩、神城の清一宅で通夜が執り行われていた。棺の前に喪主の春子。隣に堀金留吉が座っている。

向かいに田中刑事が座っている。最後の弔問客が帰つて堀金留吉が春子に声をかける、

「春子、わしは家で飯食つてくる」

と言つて立ち上がり、田中刑事に目礼をして出て行つた。

田中刑事も時計を見、周りを見回した後、

「じゃ、私もこれで失礼させていただきます」

と言つて立ち上がつた。

春子はずつと下を向いたまま返事の代わりにうなずいている。

田中刑事は棺に近づき最後の別れをした。この時棺の下に何か細工をした。棺に手を合わせて、

「じゃ、又明日のお墓に」と言つて出て行つた。

春子が一人うつむいたまま棺の前に座つている。しばらくくじつとしていた春子が、突然、

と言つて小声で叫びだした。

「ううう！」

「バカ！ もうバカ！ バカ！ ビうしてこうなるのよ。もうドジなんだから。何もかも失敗じゃないの。どうして間違つて飲んじやつたのよ。盗むところ

間ではうまく行つてたのに、もう。最後の詰めが甘かったのよ。清一に飲ませる毒入りを一気に間違つて飲むなんて、ほんとにばかじゃない？

もう一銭にもならないわ。罰が当たつたのよ。欲にくらんで大罰が当たつたのよ。ばかばかしつたらありやしない。ううう、あんた」

春子は棺にひれ伏して泣き続けた。

田中刑事と山本は、清一のことがあちこち聞いて周った。

「清一は相当母親のヨネと兄清一を憎んでましたね」

「ああ、堀金開発の事務員の話じゃ、いつか兄貴に仕返しをしてやるとか、くそつあの兄貴さえおらんけりゃとかいってたらしい」

「借金していた店の主人や友人達も口をそろえてそう言つてるそうです。とても自殺とは考えられませんね？」

「そりゃわからん。あてつけで死ぬ奴もいる  
「あてつけですか？」

「ああ、相手を殺るほどの勇氣のない奴は、憎い相手の田の前で毒をあおつて死ぬなんて、歌舞伎とかオペラとかであつやせんか？昔から」

「なるほど。話は変わりますが、清一の借金八千万円は全額塩山ヨネさんが払つそうです」

「大変な息子を持ったもんだな」

## 缶チューハイ

春子は必死でその晩のことを想い出していた。  
全てはつまく行っていたのに何故？

夜10時、予想どおりヨネの寝室あたりの灯が  
ぼつんと点いてころだけで眞寝静まっていた。  
静かに車を止めてそつと玄関のチャイムを押す。

ヨネの寝室でまだ話しおしていた清一が気がつき、  
「誰だらり今頃？ちょっと見てくる」  
と言つて部屋を出た。

玄関には神妙に清一と春子が立つていて  
ヨネが奥から雰囲気を察して出てきた。  
清一が今までになく神妙に、

「かあさん、にいさん。この間は乱暴を働いて  
本当にごめんな。今日は春子と謝りに来た」  
「まあ、どこまでがほんとうかね？」

「あげてやつなよ、かあさん。すぐ帰るんだろ、清一？」  
「ああ、この新発売のチューハイを一缶、兄貴と仲直り  
の乾杯をしたらすぐ帰る」

と言つて清一は手に提げていた缶の入った袋を持ち上げた。  
「さうか、じゃあ俺たちは厨房でいいよ。  
こつやまたたくさん持つてきてくれたなあ

清一は清二から袋を受け取り厨房へ向かう。

ヨネと春子は部屋に入った。

清一は清一に親しげに話しかける。

「ああ、新発売であつさりしててうまい」

その晩亜紀はいつものように小百合と一緒にヨシの部屋で寝ていた。皆が眠りについた頃喉が渴いて厨房へ立った。

冷蔵庫を開けてジュースを飲み扉を閉めた時、

廊下に足音といつもと違う男の人の声が聞こえた。

亜紀はスープと冷蔵庫の陰に身を隠す。

清一が先に入つてくる。

「このチューハイ、コップにとくとくと移して、  
一気に飲むとうまいんじや」

「ふーん」

後から入ってきた清一は椅子に腰掛け缶のラベルに見入っている。

清一が棚からコップを一つだし、流し台の丸盆の上におく。

缶チューハイをコップに注ぎ向こう側に薬を入れる。

## 一氣飲み

「マヂマリーは?..と

清一がしゃがんで下の引き出しを開けている。  
この隙に春紀は冷蔵庫の陰からすつと横切つて  
廊下へ出る。

「」の時思わず盆に指が触れた。  
盆は半回転して止まる。

清一、コップでマヂマリーを入れ・

「よくかきまわして、と  
かき回しながら盆を持つてくる。  
盆をテーブルの上に置き、

「」のやつて一気に飲むとつま」

と言つて乾杯もせずに、清一は一気に飲み干した。

その頃居間では、床の間に弓ネが正座していた。  
春子が屈すまいを正して深々とお辞儀をしてくる。

「」の間は本番で迷惑をおかけしました」

弓ネはふんという顔つきで、  
「じついたしまして」

その時奥で騒がしい物音がした。  
計画通りだ。」の清一、

「兄貴が倒れた！」

の大声が聞こえる、はずだつたのに。

清一の大声で、

「清一、どうした？！」

あわただしい足音が廊下から玄関へ、そのまま車が急発進して出て行つた。

清一が後を追い、庭先で、

「清一ーっ！」「

遠ざかる車。清一が呆然と立ち尽くしている。

ヨネと春子が歩み寄る。パジャマ姿のヨシと小百合と亜紀が飛び出してくる。

「缶チューハイを一気飲みして急に駆け出しが行つたんだ。仲直りの乾杯もしないうちには何がなんだか分からない？」

春子の顔色が急変した。

「あんた？」

春子が走り出そうとする。

清一が乗用車に走りより、

「春子さん！この車に乗つて。皆は家で待つてくれ。追いかけてくる」

そう言つて清一は、ポンコツの車を急発進させた。

国道148号線を大町方面へと疾走する。

春子の顔は引きつっている。  
神城に清一は戻っていなかつた。

## 転落死

「病院？」

思いつめていた春子は、そう小さくつぶやいた。

南神城のトンネルを抜けて青木湖へ出る。

直線道路に大町まで10kmの標識が見える。

湖に面した崖の急カーブ、ガードレールの隙間、両側が激しく外側に折れ曲がっていて湖に向かって

タイヤの跡がついていたが、清一は気づかずそのまま大町へと向かった。

大町救急病院に寄る。

「どなたも急患は見えておられませんが」

再び神城に戻つたが、やはり清一は帰宅してなかつた。春子を下ろして森上へ戻る。

城山邸では皆が起きて待つていた。

「清一は見つからない。今日のところほほほのままにして、とにかくもう休もう」

厨房もそのままにして皆寝床に着いた。

翌早朝である。長野県警のパトカーが神城の清一宅に止まっていた。

「ご主人が転落死されました。確認のためご同行願います」

わせび驚きもせず春子は、

「ハイ」

と返事してパートカーに乗った。

この時田中刑事は直感で春子は何かを知っている、  
清一の死を予知していた節がある。

パートカーの中で、

「昨夜、ご主人に何か変わった事はありませんでしたか?」

「一緒に森上の塩山邸にうかがいました」

「何時ごろですか?」

「夜の十時ごろです」

「どうごつづり用件で?」

「何時ごろですか?」

「そのおわびに・・・」

「そうですか」

その頃塩山邸には鑑識の車が止まっていた。

「厨房は全て昨夜のままです」

そうこう清一を、鑑識の山本は疑いの目で見てくる。

「ありがとうございます。この「ツップが清一さんのですね?」

「ええ」

「うむ」

「私のために清一が注いでくれたコップで、  
まだ手をつけていません。清一が、こうやって  
飲むとうまいと言つて一氣飲みして見せたんです」

「なるほど、その直後ですね、外に駆け出しへ行つたのは?」  
「そうですね」

## 誤飲

みんなの指紋が採取された。  
亜紀はおもしおがつっている。

捜査が進むにつれて、この家の人は犯人ではないなど山本は確信した。

清一の告別式も済み数日後、田中刑事は報告書をまとめ上げて県警本部へ届けるところであった。

白馬から鬼無里を通つて長野へ抜ける県道である。険しい山道をパトカーがゆっくりと走っている。

鑑識の山本がハンドルを握り、助手席で田中刑事がタバコに火をつけた。山本が、

「コップから青酸反応が出ました」

田中刑事、大きく煙を吐き出して、

「誤飲にしろ自殺にしろ自分で毒を飲んだのには変わりはない」

「誤飲？・・・どうしてそうなつてしまつたんでしょうかね？」

「わからん」

「あのチュウハイ、一気飲みだつたそうです

コップの指紋は清一。盆には清一と亜紀ちゃんの人差し指の指紋がついていました

「ふーん」

「別に問題は？」

「別に問題はないだらう。それより、よく運転できたなあ」

「やつですね。たまにあるひじいです、強靭な胃の持ち主で  
毒の回りが遅れることが」

「すいに顔して死んでたもんな」

「相當苦しかったと思こますよ。それで湖めがけてまつじぐひ」

「嫉妬と挫折と血暴田兼」

「清一の場合、ひねくれ方が異常でした」

田中刑事、しづらへ間をおいて、

「・・・自殺だな」

「でも覚悟の自殺だとしたら何故その場から駆け出したんでしょうか?何かのドラマのよう兄の腕に抱かれて、最後に何かしゃべって、その場で死ぬというのが自然だと思いますが」

田中刑事、タバコの火を消して、

「それはな・・・しまったと思つたんだよ」

「しまった・・・と?」

「ああ、たとえば飛び降り自殺した奴も、とんだ瞬間  
しまったと思ったのがかなりいやほほ全員そう思つん  
じゃないのかな?頭で思うんじやなくて命がそう思つんだ」

「命が・・・しまったと思つんですか?」

「たぶんな。ためらい傷と同じだ」

田中刑事、次のタバコに火をつけた。

山本が叫ぶ。

「ためらい傷？一気飲みした瞬間、命がしまったと思つた。  
その場で吐きだしゃいいぢやないですか！」

## 眞実

「男にはプライドってものがある」

「プライドねえ。それで車を駆つて湖へ」

「そのときや毒がもう回つていた。ノーブレーキで突つ込んでいる」

「なるほど、しまつたと思ったがもう遅かつた」

「そうだ」

「清一の話では、仲直りの乾杯もせずに一気に飲み干したから  
変だと思つたと言つてます。もし誤飲だとしたら。  
中身を知つてるわけですから大急ぎで救急病院、  
110でしたら大町病院を田指してまつじぐらのはずですが？」

「それはない」

「でも先輩、さつき誤飲でも自殺でもと言つましたよ」

「誤飲はありえない。小心者だった清一はいざその時となつて  
怖くなつたのだ。もし清一をほんとに殺るつもりでいても、  
とつとう実行する勇気をもてなかつた。

それこそ成り行きでやけになつて毒入りを自ら一気にあおつたのだ」

「そういうもんですかね」

「ああ、そういうもんだ」

「それだけの根性があれば、兄貴にひれ伏して、今までのこと  
許してくれと涙ながらに暴露してもいいんじゃないかと？」

「それはドラマの見すぎだ。現実は小心者のひねくれた男は、プライドのはざまでいとも簡単に死を選ぶ。その瞬間、命そのものはしまつたと感じる・・・・・自殺だ」

「なるほど。・・・先輩、よく分かりました」

美しい山並みの中をパトカーがゆっくりと走っていく。  
だんだんと小さくなりパトカーは見えなくなつた。

美しい夕焼け。白馬の里が今、何事もなかつた  
のようすに暮れようとしている。

どこかでカセットのスイッチを入れる音が聞こえた。  
テープが回りだし春子の叫び声が聞こえてきた。

「バカ！もうバカ！バカ！どうしてこうなるのよ。  
もうドジなんだから。何もかも失敗じゃないの！  
どうして間違つて飲んじやつたのよ！盗む所までは

うまく行つてたのに、もう！最後の詰めが甘かつたのよ。  
清一に飲ませる毒入りを一気に飲むなんて、  
ほんとにバカじゃない。もう一銭にもならないわ。

罰が当たつたのよ。欲にくらんで大罰が当たつたのよ。  
バカバカしいつたらありやしない・・・うううう。私の夢  
も泡と消えてしまつたじやないの・・・うううう。あんた！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6715f/>

---

座りの悪い盆（私は何も見ていないシリーズ1）

2010年10月8日15時19分発行